# 横浜市芸術文化教育プラットフォーム
# コーディネーターミーティング２０２０

横浜市芸術文化教育プラットフォームのコーディネーターが、情報交換を行うミーティング。今年度は一斉に集まらず、3 回に分けて実施しました。担当する学校とのプログラムを調整する際の悩みや、感染症予防対策はどうやっているのか？といった情報を共有する機会となりました。以下、各回のミーティングの様子を共有します。

（1）2020 年 11 月 5 日（木）10：15～11：45
場所：港南区民文化センターひまわりの郷・音楽ルーム
トピック：悩めるコーディネーターのお悩み相談会

＜参加者＞　※順不同・敬称略
沼部勝（港南区民文化センターひまわりの郷）
長谷川亜弓（鶴見区民文化センターサルビアホール）
大野美菜子、千装功（横浜市芸術文化振興財団協働推進グループ）
鳥居ゆい（横浜市文化振興課）
田中真実、高荷春菜、土橋絢菜、鶴田理紗、森崎花（ＳＴスポット横浜）

この日は、区民文化センターのお二人のお話を中心に、実施を終えた学校、現在準備を進めている学校について、具体的な感染症対策や、現場のノウハウを共有しました。

**――すでに実施を終えた学校について。**

沼部（港南区民文化センターひまわりの郷）：昨年度も担当している学校で、今年も中学 2 年生を担当しました。この学校は毎年、学校内で合唱コンクールを実施しています。合唱の指導をしてほしいとのことで、今年は 6 クラスを指導しました。例年は 3 日間のうち、2 日間は各クラスの歌唱指導を行い、最終日に合同発表会とアーティストのコンサートをしていますが、今年は合同発表会を行わず、コンサートのみ実施しました。

各クラスの歌唱指導は広めの音楽室で行いました。生徒はマスク着用で歌うので、アーティストにはマスクをしていても苦しくならないよう気を付けて指導をしてもらいました。学校側にも許可をもらって、アーティストはマスクをせず、マウスシールド＋フェイスシールドを着用して指導しました。（「横浜市立学校の教育活動の再開に関するガイドライン」最新版(12/18 版)では「マスクなしでフェイスシールドやマウスシールドのみで学校内で過ごす場合には、身体的距離をとるように」と注意喚起されている。）

合唱コンクールは、各クラスが体育館で発表しているのを撮影し、配信されたものを各教室で鑑賞するという形をとっていました。学校側は、喋らなければ集うのは OK ということのようでした。体験授業について、担任の先生は OK だが、音楽の先生は難色を示すなど、先生によって温度差があったようにも感じました。お互いに、はじめに感染症対策についてすり合わせをしたので、いつもの打合せより時間がかかりましたが、そこが大事だったと思います。

最終日のアーティストによるコンサートは、距離を十分にとって、窓を開けて換気をしながら実施しました。アーティストは生徒と距離をとった上で、マスクやフェイスシールドをせずに歌いました。公文協の研修に参加した時、通常の換気をしていれば、そこまで飛沫による感染リスクはないと聞きました。子どもたちは通常の授業、音楽の授業もマスクをしているようで、コンクールでもマスクを着用して歌っていました。

**――これから実施の学校について。**

沼部：担当の特別支援学校は、ホールで 3 日間、2 学年ずつ 30 分で音楽鑑賞の実施を予定しています。例年は 2 日間かけて WS をし、3 日目はホールで鑑賞をしてい

ますが、今年は体験はせず、アーティストと子どもの接触がないようにしました。
もう一つの小学校は、体育館で音楽の体験を要望されているので、なるべく密にならない形を考えています。学年全員（4 クラス）を体育館に集めて、体験も含めた鑑賞プログラムを予定しています。感染症対策をしながらとなると、体験がどこまでできるのか、なかなか難しいです。アーティスト側も制限があるなか、自分たちのやっていることの魅力をしっかり伝えられるか、というところでフラストレーションがたまっているのではないかと感じます。アーティストも少ない予算の中でやってもらっているし、今はいろいろなイベントがどんどん中止になり、なかには全くなくなった人も。少しでも彼らの力になれればとも思っています。

高荷（ST スポット横浜）：学校で外に出かけていく授業やイベントが軒並み中止になっているなか、アーティストが学校に来てくれるということで、通常の授業に近い形でやれるからこそ、中止する学校がそこまで多くなかったのかもしれないと感じています。

沼部：それで言うと、担当の小学校のうち一つは、当初 3 年生対象で申し込んでいましたが、5 年生対象の鑑賞会が軒並み中止になっているので、5 年生に譲ってあげたという経緯がありました。それに伴い、アーティストやプログラムも変更しました。

**――学校・担当者間の温度差について。**

沼部：ひまわりの郷では学校プログラムの担当は 1 人ですが、複数の担当者がいると、それぞれに温度差や裁量の違いなどありますか？内部的なすり合わせはどうしていますか？

長谷川（鶴見区民文化センターサルビアホール）：担当者同士の温度差はないと思いますが、学校ごとには温度差があると感じています。私が担当している小学校は、積極的です。今年は管楽器は除くことになると思っていたら、学校側から要望があり尺八の鑑賞を取り入れることになりました。また、体育館は広すぎて臨場感が足りないとのことなので、音楽室で実施したいと要望を受けました。箏は 1 面に対して 3 人→2 人と共有する人数を減らす対応をしています。担当しているもう一つの小学校は、体育館にて鑑賞プログラムを実施予定です。体験の場合、児童を半分に分けて実施することをアーティストにも提案されましたが、残されたもう半分の子たちはその時間どうすれば良いのか、という課題がありますね。

高荷：私たちが担当の特別支援学校の場合、子どもと先生合わせて 30 人くらいになるので、今年は教室を 2 つに分けざるを得ないと言われています。アーティストはどちらか片方にしか対応できないので、先生たちと裏番組をどうしようかと検討中です。現在も外部の人が校内に入れないという学校独自のガイドラインになっているため、打合せも玄関にて行いました。アーティストが決まったら教室を見学させてもらいたいのですが、ガイドラインが緩まないと難しいようです。学校側は授業自体はやりたいと言ってくれているので、なんとかお届けできる方法を探りたいと思っています。

沼部：同じ特別支援学校でも、学校によって対応が全然違うのですね。こちらは非常にウェルカムでした。

**――楽器等の消毒について。**

高荷：私たちの担当の小学校では箏の体験を 5 年生 2 クラスに実施予定ですが、先生は昨年度と同じく 1 面に対し 3 人でいきましょう、と。爪は子ども間で使い回さず、授業ごとに爪の消毒を行う予定です。箏はアルコールなどで拭けないようなので、授業前後に子どもたちの手洗いを徹底させるということで話しています。

大野（横浜市芸術文化振興財団協働推進グループ）：三味線も本体の消毒が難しいので、子どもたちに授業中も適宜手指消毒してもらうようにする予定です。三味線は 2 人で 1 挺を使用する予定です。

沼部：公文協の研修でも「ステージの床面も毎回掃除しないといけないのか」という議題に対して、掃除するよりは、使用する前後に手指の消毒をこまめにすることの方が大事だという見解になっていました。

長谷川：学校の先生も「手洗い、消毒の習慣がついているので、インフルエンザもゼロです」と言っていました。

高荷：確かに、どの学校に行っても欠席者が少ない印象です。昨日実施に行った小学校では、「ぜひ子どもたちと一緒に給食を食べてください」ということで、教室で

一緒に食べました。ただ、食べている間（マスクを外している間）のお喋りは禁止なので、何も起こらない給食でした…。子どもたちは徹底して喋らない。食べ終わっても、マスクをして静かに待機、という感じでした。

田中（ST スポット横浜）：リスク回避のために、給食などもやりとりができない状況にあって、WS などの取組をしないと、子どもたちがどんどん見えないプレッシャーや圧に押されてしまう感じがします。これでいいのかな、と思ってしまいますね。

**――館の事業の状況について。**

沼部：主催公演も、内容によっては 100％入れていて、そこそこ集客もできています。クラシック音楽の演目が多く、10 月はかなり入りました。
貸館は主催者によって温度差があり、現在のガイドラインでは対策をすれば 100％収容 OK ですが、それでも 50％でやると決める人もいます。11 月にダンスの有料公演を行いますが、50％の予定。ダンスなので演出等どのように工夫をお願いするのか、難しいところです。舞台ではマスクを外しても、裏ではマスク着用をお願いしていますが、どこまでちゃんと気にかけてくれるか…また、観客側の方が「50％じゃないの？」と思う人も多くなっていて、隣の席に人がいることに戸惑ったという声も聞きます。
利用団体については、みんなで歌う活動をしていたような団体は、もう今後やらないと決めてしまったところもあります。1 回つまずくとなかなか戻れないので、会自体をやめてしまう団体もあるようです。気軽に集まれなくなってしまったし、運営しているのが高齢の方々だと、集まれないなかで団体を維持していくのに費やせる余力も残っていない。そうして今まで使ってくれていた団体がパタッと来なくなってしまった、ということもあります。その代わり、練習利用の新規の人が増えました。練習利用の場合 30～50％OFF にしたので、「練習で使えますか？」という問い合わせが多くなりました。

**――三味線の借用について。**

高荷：学校の授業で使用するのに借りられる三味線があるとは聞いていたのですが、今回、どのようにして借りることができたのか、大野さん、教えてもらえますか。

大野：横浜市教育委員会の方で、立野小学校に 28 挺、三味線を所有していました。今回初めての借用でしたので、教育委員会の音楽の指導主事を通じて事前に立野小学校に話をしておいてもらってから、私からご連絡し、借用書を提出して借りる、という流れでした。三味線の状態が分からなかったので、お借りする際にアーティストに確認してもらいました。

田中：確か、借りてくる、返しに行くときの運搬は、こちらで車を出さないとならないのですよね。また貸出について、教員が授業で使用するのに借りるのが第一優先とのことですが、貸出予定がなければ、子どもたちへの教育を目的に教員以外が借りることもできるとのことです。体験用の三味線があって、借りることができるということが分かっただけでも、ありがたい情報でした。

そのほか、学校プログラムをきっかけに、学校とホールとのつながりのなかで実現したイベントのお話なども、伺うことができました。

（2）2020 年 11 月 6 日（金）10：15〜11：45
場所：関内ホール・リハーサル室 3（和室）
トピック：特別支援学校・個別支援学級での取り組みについて

＜参加者＞　※順不同・敬称略
木村あゆ子（アートの時間）
小野良（戸塚区民文化センターさくらプラザ）
橋本真紀子、南雲麻衣（象の鼻テラス）
高田美汐（横浜市民ギャラリーあざみ野）
絹見祐佳里（関内ホール）
大野美菜子（横浜市芸術文化振興財団協働推進グループ）
大庭一修（横浜市教育委員会）
鳥居ゆい（横浜市文化振興課）
田中真実、高荷春菜、土橋絢菜、川村美紗（ＳＴスポット横浜）

この日は、コロナ禍における特別支援学校・個別支援学級での取組についての話題を中心に、感染症対策の難しさや、そのなかでも子どもたちに届けるべきことは何かなど、皆さんと一緒に考える時間となりました。

**――コロナ禍における特別支援学校での取組状況について。**

橋本（象の鼻テラス）：担当させてもらった学校のうち、2 つの特別支援学校が、中止となってしまいました。1 校は肢体不自由の特別支援学校で、はじめは時期を遅らせれば、ということだったのですが、結局は難しいとのことで中止に。もう 1 校は高校で、先生方はやりたい気持ちが強かったのですが、体験型 3 日間の演劇 WS という希望内容を考えると難しいかな？とのことで中止に。アーティスト提案までできなかったのが残念でした。

田中（ST スポット横浜）：時期をずらすことも考えてくださっていましたが、特に高校は将来就職する子たちが多く、時期を前倒してやろうと思っても、今度は実習で子どもたちがいない、という事情があったようですね。

高荷（ST スポット横浜）：私たちが担当の特別支援学校は、今は職員以外が校内に入ることができず、打合せも玄関で行いました。親御さんたちも、呼吸器を付けていたり補助が必要な子だったりでなければ、基本的には玄関まで、という感じでした。

大庭（横浜市教育委員会）：特別支援学校だからかな？とは思います。特別支援学校の子たちは基礎疾患のある子が多く、念には念を入れてということがあるかと。1 人でも呼吸器系の基礎疾患のある子がいると、万が一のこと、命にかかわることなので、ということでのお願いだと思います。

高荷：授業内容については、打合せでこちらが提案すると、先生たちが「それはできません」ではなく、どうにか叶えようと、方策を一緒に考えてくださる姿勢がありがたかったです。その特別支援学校では、外部の講師が来て実施する授業への参加の可否について、事前に親御さんに承諾書を配って確認するとのことでした。参加しない場合は、お休みか、別の活動をするかという対応になるようです。
iPad で活動を撮影して、在宅の子に授業の代わりに見せるという学校もあったようですね。そういう代替策もあるのかもしれませんね。

**――検温やＰＣＲ検査について。**

橋本：アーティストやコーディネーターは 2 週間前から検温や体調管理を行い、問題がなければ大丈夫という感じでしたか？

高荷：見学に伺った学校では、訪問する日までの検温を記録し、伺った際に提出しました。
アーティストやコーディネーター全員が 2 週間前から検温し、学校のフォーマットに従って記録、提出はしない

が、もしクラスターなどが発生した場合に提出、というところもあるようです。

大庭：教員は毎日検温しています。もしもの時に提出のところもあれば、対応は学校によって異なります。

田中：文化施設で働いている方々は毎日もしくは出勤日は検温していますか？

一同：自己判断ですかね…

田中：神奈川県の再開加速化事業だと、ＰＣＲ検査代も含まれるところもあるし、補助金から出せるところもあるようですが、学校の先生のレベルに合わせるくらいが良いのではないでしょうか。先生たちが定期的にＰＣＲ検査を受けているなら別ですが、同じリスクで学校へ行くのに、そこまでコストをかけるのは難しいことだと思います。

高荷：特別支援学校の先生たちは子どもたちと接触せざるを得ないですから、そういう先生たちが定期的にＰＣＲ検査を受けられる体制にした方が良いなとは思います。先生たちに話を聞くと、ほとんど家と学校との往復しかせず、極力、出掛けたりすることは自粛しているとのことでした。医療従事者と変わらないレベルですよね。

橋本：アーティストのなかには現場ごとに「PCR 検査を受けてください」と言われたという方もいて、我々も気を遣いますが、アーティスト側がより気を遣っている印象です。

木村（アートの時間）：私たちの現場でも、アーティストの方がかなり気を遣っている状況でした。アーティストが行く施設によっては、公共交通機関ではなくレンタカーでの移動を指定されるところもあるらしいです。それぞれの施設や学校の考え方がさまざまだなと思いました。

**――消毒や会場の工夫について。**

木村：実施中の消毒についても、子どもたちが交代する度に、バチをアルコール消毒、床も拭いて消毒と、子どもたちが触るものは特に、アーティストが気にしていました。また、子どもたちは体験の前後で手洗いを徹底しました。床の消毒は学校にお任せしましたが、床も子どもたちが直に座るということで、お願いをしました。

高荷：楽器は消毒が難しいですよね。私たちもこれからお箏の活動がありますが、お箏の消毒とかどうされてますか？

絹見（関内ホール）：子どもたちが触れる可能性のある弦などは、ものによると思いますが、今は合成繊維のものが多いので、アルコールは使えるかなと思います。

高荷：箏のレンタル業者に聞いたところ、爪はアルコールでスプレーかけて、乾いた布で拭けば大丈夫とのこと。弦や楽器本体は傷むので消毒しないでほしいとのことでした。子どもたちに手洗いしてから触ってもらうしかないのかなと思っています。
また、私たちが担当した小学校での演劇の取組は、1 クラスずつ音楽室でグループワークを実施しました。マスクをして、換気をしていれば良いとのことだったので、円になってグループ活動したり、子どもたち同士の接触もあったりしました。どこまで厳しく気を付けるかは学校によりけりのようですね。

**――個別支援学級での感染症対策について。**

田中：個別支援学級での取組は、最初は子どもたちも人との距離を気を付けてくれていましたが、だんだん熱中してくると、それどころじゃなくなってしまいます。ダンスの取組ですが、身体に触れるし、ダンサーが面白いことをやっていれば子どもたちは近寄ってしまうし、距離のとりようがないですよね。そこは先生方も理解のうえでではありましたが。どうしても、言葉でのやり取りや状況の把握が難しい子どもたちと、何ができるのか？を改めて考えさせられていると感じます。「近づく」という強みを半減させてリスクなくやるのか。リスクをとってやるとなると、それでも伝えたいこと・大事にしたいことは何なのか、そしてどうやったらよいのか。
その辺り、木村さんのところは、どうされていますか？同じくダンスの取組で、身体接触していくタイプだと思いますが。

木村：私たちが担当の個別支援学級は人数が 38 人と多いです。情緒、知的ともに 19 人ずつをそれぞれ分けて体育館で実施予定です。ダンスや演劇を、距離をとらずにやるというのは、学校の外の立場から見れば、とても意味のある活動だと思いますし、やってみてほしいなという思いはあります。子どもたちに表情を見せたいことを考え、ダンサーにはマウスシールドも顎あての部分が白くないものを選んだりもしました。

皆さん、演劇やダンスのプログラムで、どのぐらい接触を許してやるのか？を一番聞きたいです。

橋本：私たちが担当の個別支援学級の場合は、子どもたち 25 人、先生 4 人。先生方との話し合いでは、アーティストと子どもの接触なし、子ども同士の接触もなるべくないようにしたいとのことでした。今予定しているダンサーの WS は必ずしも手を触れてやるプログラムではないので、実施できるかな？と思っています。場所は 25 人ですが、広い体育館でできればと話しています。パフォーマンスする時はマウスシールドの方が顔も見えて良いと、アーティストと話しています。フェイスシールド、マウスシールドは常備するようにしています。

高荷：私たちが担当の個別支援学級でも、パフォーマンスを見せる際はマウスシールドをしてもらい、子どもたちには距離をとって見てもらいました。その後の WS で子どもたちと近づく際はマスク着用。学校からはそれで OK とのことで、あとは、触っちゃう近づいちゃうというのは想定の範囲内でした。

田中：それが日常で先生たちは教育活動をしているので、触れることは避けられないですよね、という認識でした。今、いろんな機会が奪われているなかで、せめてこの機会は存分に体験させたい、という気持ちもあると思います。振り返りのメールで、次回は「歌がやりたい」とあり、歌もいいのか？と思いましたが、期待していただいているんだなと。実際に歌をやるかは別として、いろいろなことが制限されるなかで、このように求めてくださるのは、「本当はやりたいこと」を言える吐き出し口がない状況があるのかなと感じています。

高荷：積極的な身体接触は控えていると思いますが、グループワークや話し合うことなどは普段の教育活動でもやっていそうですけれど、どうですか？

大庭：もちろんやっていると思います。ただ、マスクを全員しているのが条件ですね。体育ですと、ボールに触ってそこにみんな集まって身体接触が起こってしまうため、ボールを使った活動ができていません。

田中：そういう体験の機会が失われていくことへの補完はどうやっていくのでしょうか。先日伺った学校で、給食を「ぜひ子どもたちと一緒に」と言われ教室で食べましたが、みんな前を向いて食べていて会話がなかったんですよね。2 年生以上は、昨年はみんなで楽しく食べていた記憶があると思いますが、1 年生は給食をみんなで会話したりして食べるという楽しみを知らない、その経験が失われていくことのリスクの方が高いのではないかという感覚があります。
グループワークが削がれたり、ボールの活動は共有・接触が起こるからと、道具の使用が削がれていったりすると、チームで何か考えたり集団のなかで学び合ったりすることこそが、学校で学ぶ意味だと思うのですが、その辺りはどう考えたらよいのでしょうか？

大庭：そうですね、そこが削がれていっちゃうと、だったら個人で勉強したらいいじゃないって話になっちゃいますね。今の制限された教育活動では、関わりが薄くなり失われちゃっているからこそ、皆さんの力をお借りしたいなと思っているところです。

田中：できる範囲で、こういう機会を外から無理やりにでも入らせてもらうことが結構大切なんじゃないかな、とも思います。学芸会がなくなったり、運動会が半分ずつ分かれて実施だったり、行事が削がれていくなかで、学校へ外からやってきてくれるものの需要が高まっている気もします。

高荷：「外部から特別講師が来るから」という特権みたいなものを使って、本来、子どもたちと共有したいことを失われずにできたらいいなと思います。

**――体験の機会の確保について。**

高田（横浜市民ギャラリーあざみ野）：元々市民ギャラリーあざみ野の事業として、個別支援学級向けのアトリエ利用というものがあるのですが、一つの学校から、今年度は公共交通機関を利用して課外授業に行くことが難しいため、学校に体験のセットを持ってきてもらえないか？と相談を受けていました。ちょうどその学校の個別支援学級の学校プログラムが決まる直前で、「もしかしたら、プラットフォームのプログラムとして伺えるかもしれない」と話していたところ、担当することになりました。
アトリエのプログラムとして、絵の具で窓ガラスとかに自由に描くというのがあって、それを希望されていたのですが、施設に来てできなくなってしまったため、先生方が工夫をして、学校の図工の授業でやってみたとのことでした。絵の具の活動は先生の方でできたので、プラ

ットフォームのプログラムでは違うものをやりましょうということで別の素材を検討中です。こういった機会が失われていくなかですが、先生方も見聞きしていたなかで、授業を工夫して実施していらっしゃると思います。今は、どういったことができるか？どういったものだったら使えるか？を一緒に考えているところです。
担当する個別支援学級の２校とも、体育館か図工室を考えています。両校 20 人以下なので、広いところであれば密も避けられるし、普段の学校生活のなかで接触するのは仕方ないことと考えています。みんな活動の前後に手洗いをすれば大丈夫ではないかと先生方と話しています。

田中：社会科見学や工場見学は、会社側の受け入れが難しかったり、公共交通機関に子どもが乗って移動となるとリスクだったりということで、そうしたイベントが軒並み中止になっているようですね。
今、子どもたちは外に出かけたり、遊びに行ったりすることが減っている感じはありますか？

大庭：減っていると思います。この状況が少し怖いなと思うところもあります。

田中：学校の行事だけでなくて、家族で出掛けていくとか、旅行もしばらく関東近県の人は出にくいとかあったと思います。ましてや、障害のあるお子さんは普段から出掛けていくことに相当気を遣っているのが、さらに出づらくなっている状況があると思いますね。

高荷：休み時間の過ごし方も変わったとかありますか？外に出ていくよりも、静かに部屋のなかで過ごすようになったとか。

大庭：子どもたちなりに気を遣っていますね。低学年が外で遊んでるからやめておこうとか、そういう意味では思いやりが生まれていたりと、100％悪影響という訳ではないと感じています。

**――各施設の自主事業などの状況について。**
橋本：私たちの連携事業のヨコハマ・パラトリエンナーレ 2020 は、障害を持つ方々も一緒に舞台に立って共につくりあげていくプログラムですが、今回はオンライン中心に変更となり、現場も相当気を遣ってやっていく心構えと聞いています。感染症対策としては、マスク着用、検温、連絡先をもらうなどをまずは徹底し実施に向けて準備しています。

南雲（象の鼻テラス）：障害のある方は免疫力がそもそも強くないため、何かあったらということで、ほとんどをオンラインに切り替えました。「触れ合い」というのを考えた時に、出会う場所がなくなる、距離感がつかめないなどの課題があって、一度やってみないとわからないことも多いなと感じています。

橋本：イベントとなると、こういった人たちが外に出て行くのが難しくなります。2 月頃のイベントは、彼らを公共の場に呼ぶのは厳しいということで、早めにオンラインへ切り替える判断をしました。

絹見：関内ホールは、8 月から自主事業を再開しています。10・11 月の落語は席人数を半数で実施しました。人数制限が解除になりましたが、解除のタイミングが難しいです。お客さんの中には 50％に慣れていると、「両隣にお客さんがいないのが安心」と、アンケートに記入されることもあるので、100％の席人数での実施はまだ難しいと思っているところです。横浜市のガイドラインに沿って、半数の人数で検温なしでやると、お客さんのなかには「なんで検温しないの？」と、過敏な方もいらっしゃいます。
高齢のお客さんの多い陽だまりコンサートは、歌うコーナーがあるため実施できていません。できるだけオンラインでのチケット販売に移行したいところですが、高齢の方はオンラインで買う方は少なく、まだまだホールに戻って来ているのは少ない印象です。
落語はみんなで笑うこともあるため、個人的にはどうなのかな？と思ったのですが、演者もお客さんも笑わないと成り立たないもの。落語の公演は完売に近い状態です。

高田：私は子どものプログラム担当で 7 月末から月平均 2～3 回で講座を再開しました。当日支払いで定員を半分にする分、材料費も半分、人件費もその分減らして開催しています。検温したり、距離をとったり、材料の共有をせずに 1 人 1 つずつのセットをつくったりしています。今までその日その場で出会うお友達と協力しながらする、粘土をこねたり絵の具を混ぜたりといった活動は、親御さんに一部入ってもらっています。
夏休みの講座は 200 人ぐらい応募がありました。現在講座は定員 10 人に減らしていますが、毎回 40～60 人ぐらいの応募があります。最も人気の高い「親子のフリー

ゾーン」というプログラムは、モニター（1 日 5 組）参加を募り、体験した感想や要望などを web アンケートで聞いて、それを踏まえて 12 月から形を変えて開催する予定です。
子どもたちが身体を使ったり五感を使ったりして、自分ができることを獲得していく機会がなくなっていて、そういう面で期待されているからか、新規の方もリピーターも来ています。来年度も、しばらくはこういう状況が続くことを前提に計画を立てています。

田中：毎年夏休みに開催している「あざみ野こどもぎゃらりぃ」はどういう展開をしていく感じですか？

高田：今まで「こどもぎゃらりぃ」は体験型の展覧会だったので、やり方を考え中です。材料を共有しない、距離を保つやり方で WS ができているため、それを反映させるとか、距離をとるから面白い遊び、みたいなのをつくっていこうかなと思っています。
モニターの保護者の声を聞くと「オンラインはもう出尽くしている」との声もあり、地域施設として対象となる人や子どもたちも限られるため、できるだけリアルをメインにやっていくのが使命なのかな？と思っているところです。

田中：人数をたくさん集めて、というのが難しくなっているなかで、人数を絞った形でも、回数を多く実施できるか？とか、文化施設としての役目が切り替わってきているのかもしれないですね。大量に集客してというよりか、こまめにどうできるか？の方が皆さん求めてらっしゃるんだなぁと思います。
オンラインに辿り着ける層と、辿り着けない層もまだまだ多数いることをもっと考えないといけないですし、今日無理やりにでもお集まりいただき、直接お会いできた方がずっと情報量も多いので、画面越し、zoom 越しに子どもたちと何かをやるといっても、限界もあるよな、と思うところですね。

全体でのミーティング後も、個別に質問し合ったり、気になっていた取組の話を聞き合ったりと、情報交換が続きました。

（3）2020 年 11 月 12 日（木）10：15〜11：45
場所：青葉区民文化センターフィリアホール・ロビー（ホワイエ）
トピック：体験型プログラムの内容の組み方について

＜参加者＞　※順不同・敬称略
新山久志（鶴見区民文化センターサルビアホール）
近藤喬之（戸塚区民文化センターさくらプラザ）
石野克彦（緑区民文化センターみどりアートパーク）
中村康裕（横浜市民ギャラリーあざみ野）
大野美菜子、早見史絵（横浜市芸術文化振興財団協働推進グループ）
中澤務（横浜市教育委員会）
入江淳一郎（横浜市文化振興課）
田中真実、高荷春菜、土橋絢菜、鶴田理紗、森崎花（ＳＴスポット横浜）

この日は、コロナ禍における体験型プログラムの実施・調整状況や、計画する際の悩みを中心に、学校・アーティストとの具体的なやり取りや、そのノウハウを共有しました。

**――それぞれの担当校の取組状況について。**

中村（横浜市民ギャラリーあざみ野）：私たちが担当の小学校では、図工室で金属加工の実施を行いました。3 人 1 組でグルーガンを共有して使ってもらいましたし、用意した素材も、好きに選んで持っていってもらいました。人数を分けて実施はしましたが、やはり密だなあと。学校もきっと普段から密なんだなと思いました。感染症対策に対して非常に気を遣いましたが、学校自体は子ども同士の接触にそこまで厳しくなく、こちらの方が過敏だったのかもしれないですね。密になっている子どもたちに対して、コーディネーターが「離れろ」とは言えないですし、先生も注意しないので、普段からこういう状況なんだろうと思いました。

高荷（ST スポット横浜）：ダンスの WS などで、彼らの高揚感を消してまで、離れるよう言った方がいいのか、コーディネーターとして悩みますよね。

中村：制御できない場面があった時、「怒鳴る」「注意する」ではない回避する術を考えなくてはですね。

田中（ST スポット横浜）：こうしたことについて、教育委員会に現場の先生から相談など寄せられたりしていますか？

中澤（横浜市教育委員会）：新しい活動を今年初めてやるときは、相談がきますね。学校が再開してからしばらく経っていて、子どもたちの様子などある程度予測はついてきたと思うので、「こういう場面のときは教員が指導する」など事前に確認しておくのが良いかと思います。特別支援学校・個別支援学級の場合は規模や目的も大分違うので、事前の調整のなかで、想定されることは教員と確認しておくのが良いかと思います。障害によって対応の仕方が異なりますし、学校や子どもによって状況が違うと思いますので。

石野（緑区民文化センターみどりアートパーク）：私たちが担当の小学校では、9 月にみんなで歌を作りました。なんとなくですが、緑区は横浜市の中でも一番郊外なので、コロナにあまり敏感ではない印象があります。都心の方の方が感染症対策に厳しく、緑区・都筑区あたりは厳しくない印象です。WS 中、アーティストはマウスシールドを着用し、3 日目は 4 クラス合同で全体練習を行えました。（「横浜市立学校の教育活動の再開に関するガイドライン」最新版(12/18 版)では「マスクなしでフェイスシールドやマウスシールドのみで学校内で過ごす場合には、身体的距離をとるように」と注意喚起されている。）

高荷：私たちが担当した小学校での演劇の取組では、5〜6 人を 1 グループにしてグループワークを行いました。そこは金沢区の学校でしたが、そこも感染症対策にそれほど厳しくなかったです。マスクは全員して、換気をしていれば、集まってグループワークをすることは大丈夫

でした。

**――アーティスト選定について。**

中村：アーティスト選定について、みなさんどうされているのか気になっています。市民ギャラリーあざみ野では、これまで展示で関わりのあったアーティストにお願いをするなどしていますが、特にコロナの状況のなか、はじめましてのアーティストとの交渉が難しいなと感じています。実施するかしないかなど状況が不安定ななかオファーもしづらく、みなさんがどうしているのか知りたいです。

田中：ある特別支援学校では、パフォーマンス中も必ずマスクを着用するようにと学校医から指摘があり、予定していた和太鼓の演奏家の方が、それでは演奏は難しいと判断して出演を降り、他の楽器の演奏家に変更したということもあったようです。感染症対策でさまざまな制限があるなかでも、折り合いをつけてやってもらえる方かどうか。またアーティストのなかには、自分が保菌した状態で学校や施設に行って感染源となってしまうことを恐れている方もいますね。

新山（鶴見区民文化センターサルビアホール）：サルビアホールでは、館として毎年オーディションをしてアーティストバンクとして登録をしています。オーディションの段階でも、アウトリーチもやってもらえるかどうか？という視点も含めて選んでいます。
昨年度も担当した邦楽のプログラムを希望している小学校は、今年度も同じアーティストと行う予定です。体験メインだったのが今年は鑑賞メインになってくるので、内容を変えなければならないですが、昨年の様子もよく分かっているので、柔軟にやってもらえるかなと思っています。

高荷：演劇を希望していた学校では、まず学校と私たちとで打合せをし、人権教育指定校ということもあり、毎年６年生がいじめについて考える劇を作っているとのことで、劇を作る前段階としての WS を行うことになりました。アーティストは、ST スポットでよく公演をしてくれている方に声を掛けました。被災地での WS の経験もあると聞いていましたし、誰かが体験したことの語りを聞きとり、そこから演劇を立ち上げていくスタイルに注目しました。

田中：「いじめは良くない」ではなく、「なぜいじめは良くないのか」というように子どもたちが「考えられる」場が必要だと考えました。学校は正攻法を選ぶと思うので、アーティストからの視点で、想像すること・考えることができる WS を目指しました。

**――体験型プログラムの組み立てについて。**

新山：担当する小学校では、2 日間で 3 クラス、ダンスの取組を体育館で行いますが、アーティストにはできる限り子どもたちと距離をとってもらい、なるべく直接触って教えることがないようにと考えています。子ども同士の接触は休み時間もわいわい遊んでいるのであまり気にしていませんが、アーティストとの接触が極力ないようにと思っています。密集する動きは避け、一人ひとりの動きをメインにプログラムを考えています。トータル 107 人ですが、1 クラスずつやってほしいと学校から言われています。

中村：担当している小学校・個別支援学級は 16 人ですが、年齢も障害の度合いもそれぞれ違う子どもたちに対してのプログラムということで思案中です。1･2 日目で、かぶっただけの布にフェルトをパッチワークした衣装を作って、それを身に着けて最終日に踊る予定です。2 つの教室に分散して活動を行い、振りを覚えてもらい、3 日目にソーシャルディスタンスをとりながら、それぞれができるダンスを個別に楽しんでもらう、というような内容です。コロナではなかったら、この形にはならなかったと思います。コーディネーターからアーティストに諸条件を伝えて、アーティストに大まかなプログラムを考えてもらい、出してもらった内容を踏まえてどうしたらスムーズにできるかをコーディネーターが考えた感じです。
先生方は、せっかくやるならという感じで、こちらを使い倒そうという意欲が感じられます。個別支援学級の先生は特に常にネタを探していて、アーティストの面白いアイデアを求めているところがあると思います。

田中：個別支援学級での取組は、子どもたちがみんなバラバラの特性を持っているので、衣装づくり（美術）・ダンスなど複数のジャンルでアプローチした方が、子どもたちのチャンネルが開く可能性があるのかもしれないですね。ちょっとでも子どもたちに引っかかるものがあれば、と先生方は求めていると思います。私たちの担当の個別支援学級でも、ダンス、美術、音楽など手を変え品

を変え、さまざまなアプローチのWSを予定しています。伝統芸能の体験プログラムは、どのあたりが大変でしょうか？和楽器の体験となると、体験用の楽器を用意するところも大変かと思うのですが。

石野：私たちの担当の小学校では、3 日間の和太鼓の体験プログラムでした。3 日間とは別の体育祭の日に、成果発表という形になりました。3 日間で 3 日目に発表となると、実際時間が足りないことが多いかなと思います。今回は＋αの 1 日もプログラムとして計画しましたが、その分の経費をどうするかはなかなかシビアで…

田中：学校側も、この体験プログラムをどう使っていくか難しいところもありますよね。周年行事に充てたり、2 分の 1 成人式や生活発表会に充てたりするケースもあります。しかし、最後の発表会までこちらも面倒を見るのか否か、そこの切り分けが難しい。アーティストが発表に巻き込まれすぎると大変だし、巻き込まれないのもそれはそれで寂しいというところがありますよね。

石野：先生方の受け止め方として、学校は直接経費を負担しないので、お金がかかっている意識がないうえに、先生方も余裕がないので、渡りに船の意識が多少あるのかな、と思います。こちら側が限られた予算の中でできることとできないことを、どう伝えるか。そのような仕組みをもう少し考え直してもよいのではないかとも思います。

中澤：おっしゃる通り、先生方はなかなか予算の考え方が分からないところがあると思います。一つの事業にいくらかかるかの実感がなかなか持てない。事前にお話する時に、できることとできないことを共有したり、行事ありきではないということ、この活動を通して何を目指すのかの「ねらい」を再確認してもらうのがいいのではないでしょうか。

そのほか、授業のなかでの iPad の使い方（動画を撮影して欠席者や他の教員にすぐに共有するなど）や、楽器や物品の消毒方法などについての情報を共有しました。

今年度は、こうした小規模での顔の見える情報交換の機会とさせていただきましたが、いずれの回も、参加したコーディネーターのみなさんと有意義な情報交換ができました。次年度以降も何らかの形で、一緒に考えていくことのできる機会をつくっていきたいと思います。
お集まりいただいた皆さま、会場をお貸しいただいた施設の皆さま、ありがとうございました。